

岡部耕大

# 新宿ムーラン・ルージュ

赤い風車の回る劇場(こや)

「東京行進曲」の歌が流れて聞

都田津々子（十九歳）が「上海帰りのリル」を唄っている。

一 新宿ムーラン・ルージュ 廊下 昭和二十六年五月

島山福子（三十九歳）と佐々木千里（六十歳）が対峙している。遠くに柳沢勉（二十歳）がいる。踊り子が「東京シューシャンボーイ」を歌い踊る声。

千里

「東京シューシャンボーイ」かあ。まったく、昭和も二十六年にもなると、へんてこりんな歌が流行りやがるなあ。なあ、福子姐さん、あんた、この新宿ムーランルージュを辞めるらしいじゃねえか。あんたほどの妖艶な踊り子に辞められると俺としても困っちゃうんだけどなあ。

福子

佐々木千里プロデューサー、あんたが天性の賭博師であり、女好きなのはいいとしてさ。プロデューサーとしては禁ずべき劇団の女優に手を出す悪癖と、経営者としての立場を割り引いても、かなりのケチってのはいけないねえ。

千里  
福子

あんた、ムーラン・ルージュを立ち上げてから、一日三円の貯金を実行してるそうじゃないか。経営が軌道に乗ってるんならともかく、客足は増えず借金ばかりが膨らんで、いつ解散かと座員のだれもが危ぶむ苦難の時期でさえも、毎日欠かさず貯金をして、どんなに座員の給料の支払いに窮しても、決して銀行から貯金を引き出しはしないそうじゃないか。

千里  
勉  
福子

あなたは、違う。千里マスターは。黙ってる、それでいいんだ。あんた、数年間にわたって銀行に貯金を続け、一度も引き出さなかつた唯一の顧客として、銀行から表彰されたそうじゃないか。節約してるんだねえ。

千里 よく知ってやがるなあ。表彰状は押入れの奥の奥に隠して  
たのになあ。

福子 銀行員にもわたしのファンはいるんだよ。ファンはなんでも  
喋ってくれるのさ。

千里 お喋りな銀行員もいるもんだよなあ。(泣いて)俺は誤解され  
やすいタイプだからなあ。なあ、辞めないでくれよなあ、な  
あ。

勉 マスター。

福子 泣き落としはやめとくれ。とにかく、わたしはムーラン・ルー  
ジュの踊り子は辞めますからね。明日から道ですれ違って  
気安く話しかけたりするんじゃないよ、いいね。明日からは他  
人の関係なんだからね。

千里 へえ、女は素早く過去を割り切れるものなんだなあ。

福子 ああ、女は過去を白紙にする消しゴムを持つてるのさ。

千里 (泣いて)なんでもするからさあ、辞めないでくれればあ、  
過去を白紙にする女の消しゴムで過去を消しておくれよう。

福子 もう、泣き落としはやめなつてば。

勉 いい役者振りだよねえ。

千里 (けろつと泣き止んで)あなた、来年、有楽町に日劇ミュージ  
ックホールという、踊り子がショーを唄い踊るレビューが誕  
生するらしいじゃねえか。それも、あなたがムーラン・ルー  
ジュを辞める原因のひとつじゃねえのかい、えっ。

福子 時代は過ぎるといふことかしらねえ。

福子、去る。

千里 勉、付いて行ってやれ。

勉 えっ。でも、マスターは。

千里 俺は一人でも、どうにでもなる。勉、おまえは歌にもコントに  
も才能はねえ。やつぱり日本橋の呉服問屋の御曹司だ。福子を  
フォローしてやってくれ。  
マスター。

雑誌記者竹上誉(四十四歳)がパチンコをしている。「軍艦マーチ」が流れている。壁には黒澤明監督の大映映画「羅生門」のポスターが貼られている。

誉

なんだからなあ、パチンコには軍艦マーチがよく似合うんだよなあ、なんてかなあ。復古調は軍艦マーチに乗ってかあ。昭和二十六年一月三日、第一回NHK紅白歌合戦の放送。三月九日には三原山大爆発。四月十一日にはマッカーサーが連合軍最高司令長官を罷免された。サンフランシスコ講和条約、ベニス国際映画祭では黒澤明の「羅生門」がグランプリを受賞。ルース台風、力道山が日本初のプロレス試合、パチンコ大流行、銀座のキャバレーで「軍艦マーチ」の復活、日本初の総天然色映画「カルメン故郷に帰る」でカルメンは故郷に帰って、昭和二十六年も暮れるか。(パチンコ台を叩いて)おうい、姉ちゃん。入っているのに玉が出ないじゃねえか。えっ、入ってない、姉ちゃん、なにをいつてるんだよ、入ってるよ。なにつ、パチンコ台、パチンコ台を叩くとはなんなんだよ。

カメラを持った林智恵(二十五歳)が入ってくる。

智恵

もう、パチンコ屋はチンジャラジャラチンジャラジャラって、うるさいわねえ。

誉

おう、カメラマンの智恵。待ってるよう、いまに景品のチョコレートやキャラメルや舶来の缶詰をうんと取ってやるからな。竹上さん、誉さん、ムーラン・ルージュの踊り子だった日舞の島山福子お師匠さんを、新宿御苑のご自宅で取材の時間なんだから。

誉

わかってらあ、浅草から新宿御苑は地下鉄で目と鼻の先だな。

智恵

へえ。去年封切りの黒澤明監督の「羅生門」はまだ上映してるんだねえ。

誉

ああ。なにせ、グランプリ受賞作品だからなあ。

智恵

黒澤明は、いまは「生きる」の脚本の執筆を始めてるんだってねえ。

誉 智恵

おまえ、よく知っているなあ。

うん。東宝の映画会社に知り合いがいるからねえ。テーマは、人生の残り七十五日しか生きられない男の物語だって。

へえ。

なんだか、とつても難しそうな映画だわよねえ、わたし、黒澤明の映画は娯楽作品が好きなんだけどなあ。さあ、急がないと。

智恵 誉

### 三 歌舞伎町裏 藤堂瀧子のアパート 昭和二十七年 春

この舞台に出演する福子を除く女優陣によって「ラムール・リズム」が歌い踊られる。アコーディオンを弾いているのは林智恵である。柳沢勉、西浦英二（二十歳）、柳武（二十二歳）、山下純一郎（二十五歳）らの男優陣は大喝采である。それぞれが本編の舞台衣装である。蓄音機を回しているのはルパンを着た横山大輔（三十二歳）である。踊り子の藤堂瀧子（三十歳）が焼酎の一升瓶をラッパ飲みすると、舞台中央に躍り出る。

瀧子

（踊りながら）あたいがムーラン・ルージュで踊っていたのは、昭和六年の大晦日から昭和二十六年五月のムーラン・ルージュの解散までさ。足掛け二十年はムーラン・ルージュで踊ったのさ。あんた、新宿ムーラン・ルージュを知ってるかい。ムーラン・ルージュといってもパリのフレンチカンカンのムーラン・ルージュではないんだよ。新宿にあったムーラン・ルージュのことさ。正式な劇場の名称は新宿座。その専属の劇団の名前がムーラン・ルージュさ。赤い風車の回る小屋。屋根には、風が吹いてもあまり回らない錆びて色あせた赤い風車があったりしてさあ。そうだよねえ、多くの俳優や劇作家や観客のそれぞれ大学の学帽を被った学生さんや、弁当箱を持った若い労働者の胸中にいまも流れる理想郷。そう、戦前戦後を通じて新宿の夜空に赤い風車のイルミネーションを灯し続けたムーラン・ルージュに通い詰めた強烈なファンは、いまもなお郷

大輔

愁に似た想いをそれぞれの胸に秘めているに違いないのさ。ねえ、大輔ちゃん。大輔ちゃんってばさあ。ああ、そう。入場券売場はテケツで、半券を受け取るところはモギリ、客は百人を一束、イッソクと数えてた。テケツで売っている入場券は八十円だったが、ムーランと同じ帝都座五階のヌードショウは大入り満員で昭和二十四年の幕を開けた。そうだったよねえ、瀧子姐さん。

鶯が鳴く。

瀧子

そうだったよねえ。ああつ、鶯が鳴いてらあ。もう、昭和も二十七年の春かあ。

純一郎

そう、昭和初期の武蔵野館通りの様子を、パリの学生街カルチエ・ラタンのようだったと書いた劇作家もいたよなあ。瀧子ちゃん、あんた、焼酎をラツパ飲みして、舞台の上で不器用に大柄な姿態を惜しげもなくくねらせてさ。汗ばんだ肌から発散するアルコールとドーランの入り混じった匂いがたまらなかつたぜ。

武

ムーラン・ルージュは赤い風車というフランス語だから、屋根の上で赤い風車がお愛想にペンキが剥げかけて、まだらになった赤い羽根を折れそうに揺すって見せるだけだったっけ。

勉

また、ムーランルージュの観客の目が凄いのなんのつて。まるで銀シャリをお預けくつてる浮浪者みたいな凄いやつ。おつかねえなんてもんじゃありやしねえ。いままで芝居や映画をあんな凄い目で観た奴はいやしねえ。

瀧子

だったわよねえ。帝都座の五階から一階まで、更に舗道にまで溢れている行列には圧倒されたわよねえ。

英二

額縁ショウとはよくいったもんだぜ。ストリップパーは額縁の中で名画そっくりのポーズをとっているだけさ。動いたら逮捕だからねえ。動かねえ、まったくびくとも動かねえ。動かねえからストリップじゃないわけだ。理屈だよなあ。額縁ショウの絵の題名は「ビーナスの誕生」だってんだから笑っちゃうぜ。ビーナスだとさ。

瀧子

だけど、観客は先を争って殺到して折り重なり、固唾を飲んで見守っていたじゃないか。あんたも、早稲田の学生のくせしち

武

やってさあ。ねえ、早稲田大学の学生さん。親の仕送りの月謝もムーラン・ルージュに使い果たしやがって。まったく親泣かせな息子だぜ。好きな踊り子でもいるんじゃないのか、えっ。

英二

新宿帝都座五階劇場の田村泰次郎の「肉体の門」は凄かったからなあ。敗戦後の廃墟となった東京上野駅の地下道は戦災浮浪者や孤児、夜の女たちの巢窟なのさ。

武

ああ。娼婦の一人、ボルネオ・マヤが警察に追われたやくざ風の男と恋愛関係に陥った。「肉体は売っても情けを移してはならない」。マヤはこの掟に従い、仲間から半殺しの宙吊りのリンチにされる。また、裸にされたマヤのリンチの場面が凄いだよなあ。小政のおせん、ふうてんお六、ジープのお美乃、癖のある女ばかりだ。ロングスカートと口紅が色っぽくてさあ。

大輔

ああ、劇場の客送りに流れる曲はグレンミラーのスイングジヤズさ。ダグラス・マッカーサーのお陰だぜ。

灌子

ねえ、ムーラン・ルージュで踊っていた踊り子の福子姉さん、どうしているのかしらねえ。

大輔

ああ、ムーラン・ルージュを主宰する佐々木千里と意見の違いで仲違いをした福子姉さんかい。なんでも、新宿御苑の近辺で日本舞踊のお師匠さんをやつてるとの噂だよ。福子姉さん、よつぼど新宿ムーラン・ルージュを日舞かジャズの健全なミュージカルの劇場にしたかったんだねえ。だけど、この蓄音機も古くなってガタガタだ。

灌子

蓄音機。レコードプレーヤーといったらどうなのさ。さあ、福子お師匠さんのレビューでは、あたいの踊りがすんだらさ、あんたら五人でコントをやるんだからね。

勉

玄治店のコントだって、嫌だなあ。

英二

だいたい、俺は大学の卒論にムーラン・ルージュを書きたいから、その取材を灌子姐さんにしに來ただけなんだ。その俺が、なんでコントにまで付き合わなければならぬわけさ。

勉

だから、ムーラン・ルージュの踊りを踊ってあげたじゃないか。灌子姐さんの踊りのお礼が、福子お師匠さんのムーラン・ルージュの踊りのコントかよ。

武

だいたい、コントをやる劇場が武蔵野館通りになんかあるもんか。

灌子  
純一郎

それが武蔵野館の隣のビルの地下にあるんだってばさあ。  
へえ、武蔵野館の隣のビルの地下にコントをやる劇場なんてあるのかい。

灌子  
純一郎

もう、疑り深いミシンのセールスマンなことねえ。  
ぼくはね、丸の内に本社のあるミシンのセールスマンなんですよ。エリートのミシンのセールスマンなんだ。舶来のミシンのセールスマンなんだから。

灌子  
純一郎

だから、コントさえやってくれれば、舶来のミシンのひとつふたつは買ってあげるってばさあ。  
ほんとですね、嘘じゃないでしょうね。嘘つきはうちの女房だけでたくさんだ。

灌子  
純一郎  
勉

ふんっ、あんたの女房を嘘つきにしたのはあんたなのさ。  
どうしてさ、ぼくは女房の嘘を見逃してやってるんだ。  
だから、女房は嘘を重ねるのさ。女心は嘘心ってね。  
女心は嘘心。灌子姐さん、福子お師匠さんはわたしを日舞の名取にしてくれるんでしょうねえ。えっ、嘘じゃないよね。お稽古や名取のお金は、日本橋の父の呉服問屋の帳場のお金をねこばばしたお金なんだからね。

武  
勉

わかってますってばさあ。しかし、日本橋の呉服問屋の頑固親父に帳場の金をねこばばしたのがばれる日は近いよなあ。  
おだまり。(襟を直しながら)おまえだって、丁稚のくせに日舞を習ってどうするつもりさ。あっ、おまえも福子お師匠さんを狙っているんじゃないのかい。

武  
英二

ブウツ、残念。福子お師匠さんは俺のタイプじゃないんだねえ。だけど、この灌子さんのアパートの会話は卒論には書けないよなあ。しかし、歌舞伎町裏のこのアパートが日本舞踊の踊りの稽古場とはなあ。

灌子  
英二

あんた、早稲田大学の学生なんだって。  
はい。文学部で日本文学の古典を専攻しております。万葉集です。(唄って)「都の西北早稲田の杜に」。  
ふうん、新宿には早稲田大学のてんぷら学生は多いからねえ。このお洒落の時代にわざわざ早稲田の学生服に学帽だものねえ。

純一郎  
灌子  
純一郎

てんぷら。てんぷらってなんなんだ。  
衣だけのてんぷらさ。  
衣だけ。なんだい、こいつ、早稲田の偽学生だったのか。



英二 冗談はコントだけにしてくれないか。(学生証を見せて) ほら

つ、ちゃんと学生証もあるんだからさあ。

大輔 こんなものはおめえ、あの裏路地の代書屋の髭の親父に頼め

ば、いくらでも書いてくれるさ。

灌子 ねえ、福子お師匠さんのレビューでコントの玄治店をやっ

ておくれってばさあ。ギャラは弾むからさあ。

勉 へえ、ギャラは弾んでくれるんだ。では、与話情浮名横櫛、三

幕目、源氏店妾宅の場。

純一郎 (芝居が掛って) え、御新造さんえ、おかみさんえ、お富さん

え、いやさ、これ、お富、久しぶりだなあ。

勉 そういうおまえは。

与三郎だ。

灌子 へたつぴいな演技だことよねえ。ちつとも芝居になんかなつ

てないじゃないか。

勉 まだ、稽古不足なんだからさあ。

灌子 だけど、福子姐さんほどのお人が、このままですますわけはな

いわよねえ。

勉 なんだい、福子お師匠さんは、いまをときめくムーラン・ルー

ジュの主宰者の佐々木千里と張り合おうってのかい。

灌子 福子姐さんならやりかねないわよねえ。

大輔 ほう。こいつは見ものだねえ。灌子姐さん、焼酎の一升瓶のラ

ッパ飲みは大概にしてくれないか。

灌子 大輔ちゃん、あんた、今日、銀座の日劇ミュージックホールの

踊りのショーを観に行ったんだってねえ。

大輔 ええ、まあ。そのついでといっちはなんです、銀座東宝で黒

澤明監督の「生きる」を観て来たんだ。(唄って)「命短し、恋

せよ乙女」ってね。

灌子 えんじ色の絨毯に赤いピロートの椅子。緞帳は金色のしぼり

で、舞台中央から客席に向かって盆舞台が突き出している。豪

華そのものよねえ。まさに紳士淑女に相応しい劇場だわ。ヌー

ドによるエロチシズムは狙いますが猥褻は狙いません、か。

ストリップ界への絶縁状だねえ。肉体の芸術、ヌード宣言かい。

ああ、これも福子お師匠さんがムーラン・ルージュの踊り子を

辞めた原因のひとつかもしれないねえ。

大輔 はあ。やつぱり、灌子姐さんも日劇ミュージックホールを御覧

になったんですねえ。

瀧子

勉

大輔

そりや、これだけ評判になれば、放つてもおけないじゃないかあ。ああ、ストリップもとうとう銀座の有楽町に進出かい。おまえ、黒澤明が「七人の侍」の映画製作の準備をしてるのは知ってるかい。

ああ、知ってるよ。武者修行の侍が、野盗から村を守るために雇われる実話を脚本にしてるんだってなあ。智恵が、東宝の知り合いから聞いたらしい。

「上海帰りのリル」の曲が流れる。

#### 四 新宿御苑 福子の自宅兼稽古場 昭和二十七年 春

横山大輔が蓄音機を回している。蓄音機から流れる「さのさ」のメロディーで、畠山福子が歌い踊っている。ドラムとアコーディオンが置いてある。婦人雑誌女の友記者竹上誉が手帳とペンを持って控えている。

カメラを構えたカメラマンの林智恵が盛んに構図を決めている。

福子

どうだい。これが明治からこつち、花の大東京で歌われている本家のさのさ節さ。新宿ムーラン・ルージュのフレンチカンカンもいいけど、やっぱり踊りは日本舞踊だよねえ。

はい。さのさ節の純日本の哀調を帯びた旋律が庶民の心をとらえたんでしょなあ。福子師匠、日舞のお師匠さんのあんなのさのさ節の踊りは、しっぽりと濡れ過ぎていけねえや。

へっ。冗談はなんだかんだの神保町の勘弁ソングだよ。誉さん、あんたの社の婦人雑誌女の友が、また新宿ムーラン・ルージュの特集をやるのかい。

誉

まあ、婦人雑誌の記事のネタがなくなれば、ムーラン・ルージュの踊り子の特集さ。婦人雑誌の読者の主婦は踊り子のスキヤンダルを喜ぶからねえ。

福子

主婦は、この人にくらべれば、あたしなんかはまだいいのよねえとかなんとか、優越感に浸りたいだけなのさ。あんた、いい

写真が撮れたのかい。

智恵

はい。お師匠さんの顔はどこから撮っても素敵ないいお顔を  
なさってますからねえ。まるで、東映か大映か東宝か日活か新  
東宝か、どこかの映画会社の女優さんみたいだよ。

福子

あらっ、お世辞が上手いことだよねえ。

智恵

だって、これが取材写真を撮るテクニクだって、竹上さんに  
教えてもらったのさ。ねえ、竹上さん。

誉

黙ってる。頼むから黙ってる。

福子

タイピストに電話の交換手、ビルの受付嬢に洋服のデザイナー  
ーに看護婦さんにカメラマンに婦人警官。戦後の女の職業は  
増えたわよねえ。

智恵

へえっ、ドラマとアコーディオンが置いてあるわ。さのさにド  
ラムにアコーディオンかあ。この家、戦後にふさわしく和洋折  
衷だよねえ。

誉

こいつは、あたしはドラマーなんて唄って、アコーディオンも  
弾くし、ドラムも叩くんですよ。やくざな娘で困っております。

智恵

あらっ、女のドラマーとカメラマンは評判がよくってよ。撮ら  
れる男の人も、女がカメラマンだと喜ぶのよねえ。ねえ、竹上  
さん、誉さん。

誉

黙ってるってば、頼むから黙ってるっ。

鶯が鳴く。

福子

ごらんな、鶯も戦後の声で鳴いてやがる。

誉

昭和も二十七年の春ですものねえ。だけど、新宿御苑の福子お  
師匠さんの新築の家は檜のにおいでいっばいですなあ。

福子

それもこれも、レイテ沖で戦死した主人のお陰でさあね。

誉

戦争未亡人だものなあ。戦争未亡人の表情は、しっぽりと濡れ  
過ぎていけねえや。

智恵

(撮って) シャッターチャンス。いま、とつても芝居がかった  
表情したから、きつといい写真になるわよねえ。女優になった  
ら、ブロマイドにでもすればいいわよ。

福子

もう、お世辞はおやめったら。

智恵

まあ、まんざらでもないんだわねえ。

福子

あんた、どうせ取材するのならさあ、ムーラン・ルージュの主  
宰者の佐々木千里に取材したらどうなのさあ。あの男にはス

誉

キャンダルネタはいつでも転がってるじゃないか。佐々木千里か。取材の約束は取り付けてはありますが、どうも気乗りがしないんだよね。

福子

あたしも、佐々木千里が嫌いでムーラン・ルージュを辞めたのさ。

誉

なにせ、エロ・グロ・ナンセンスが佐々木千里のモットーですからなあ。佐々木千里は興行師としては辣腕家であつたかもしれないが、プロデューサーとしてはいけないねえ。なにせ、脚本がまったく読めないんだから。

大輔

それはひどい中傷だと、勉はいつてましたけどね。

福子

ああ、踊り子を脱がせるのがレビューだと勘違いしてるのさ。諸君、今度のような作品はクーラーい気持になる。文芸部を解散しようじゃないか。これが佐々木千里の口癖だ。無責任な放言だよ。解散する気はまったくないんだから。

福子

低賃金で優秀なメンバーを雇っているからねえ。あいつの特技は泣き落としさ。

大輔

中傷なんだけどなあ。

誉

福子お師匠さんとはぶつかるとはねえ。ねつ、佐々木千里は曾我廼家五九郎一座の二枚目役者だったんですってねえ。

福子

らしいわねえ。女の得意客を泣き落としで獲得してさあ。

誉

いまじゃ、ぶくぶくと太ってちよび髭だ。見る影もありやしねえ。

福子

佐々木千里は、曾我廼家五九郎一座で興行師に憧れを持ったのさ。興行師は、うまくやれば甘い汁を吸える職業だと知ったんだろうねえ。興行が失敗すれば、手提げ金庫を持ってとんずらさ。そして、ほとぼりが冷めた頃にまた戻って来る。

誉

なにせ、曾我廼家五九郎は全盛期には浅草六区に数件の劇場を持ち、一座のスター女優五人を妾にしていたという猛者だからねえ。

福子

いけすかない奴だわよねえ。

誉

そんな曾我廼家五九郎を佐々木千里は憤るといふよりは、むしろ羨望したらしい。

憧れて、真似をしたかったんだろうねえ。

大輔

出る杭は打たれても出る。それが千里の口癖らしいぜ。

誉

ねえ、福子お師匠さんは、どうしてムーラン・ルージュに入ったんです。

福子

おや、わたしの生い立ちはまだ喋ってなかったかい。

誉

ええ。お師匠さんの雰囲気は聞くのを憚られる雰囲気だったものでねえ。福子お師匠さんの生い立ちを、ぜひ。

智恵

ええ、ぜひ。

福子

そうかい。寒い冬の夕暮れ、数えて四歳の娘が銘仙の緋の一張羅を着せられて、下谷竹町の棟割長屋の、とある一軒の格子戸の前に立っていた。寒いはずさ、雪が降り始めていたのさ。想像してごらんな。

……。

福子

どんな道順で、そこまでだれと来たのか、娘はなにも覚えてないのさ。ただ、寒さに震えていたのだけは覚えているのさ。いつもお腹を空かせていてさあ。

誉

そう。

福子

そんな娘は、棟割長屋の人のいい叔父さんと叔母さんに貰われて、貧乏だったけどすくすくと育ったのさ。日舞や三味線のお稽古までさせて貰ってさあ。わたしになにかを期待してたんだろうねえ。だけど、芸者だけはまっぴらだったさ。嫌だった。堅気で嫁ぎたかった。

ほう。

福子

なんでも、娘は神田明神下の下宿屋の娘と、下宿屋に下宿していた富山の菓売りの行商人との間にできた不義の子供だというのは、のちのちに知ることになる。

そうですか。

福子

その頃、松竹歌劇団ができて、踊り子の募集があったのさ。それには履歴書と写真があるの。わたしは、お友達から女学生の制服を借りて、借り着の女学生姿で写真屋へ飛び込んで、おすましの写真を撮ったのさ。

誉

そうだったのですか。あの、カジノ・フォーリーの踊り子には入試試験のようなものはなかったのですか。

福子

ありましたわさ。カジノの楽屋で待っていると、座頭格の人がやって来て、いきなり「足を出してみな」と命令口調でいうの。わたしが、スカートを少し上に上げると、ちらっと脚を見て「合格。明日から、おいで」。これで決まりさ。あっけない入試試験でしょう。それがあたしの数え歳で十五の春だったわねえ。

誉

へえ。

福子

その頃、カジノでは踊り子がズロースを落とすと評判になったり、「インチキレビュー」だとか、全国的に風靡した「エロ・グロ・ナンセンス」などという流行語がカジノからばらまかれたのも事実だわよねえ。

誉

それも千里の仕業かねえ。あの時代、浅草は退廃の温床だったんだなあ。

福子

こんな身の上話でよかったら、婦人雑誌の記事にしてもいいんだよ。

誉

そんなもん、戦後の日本では記事にもなんにもなりやしねえ。どこにでも転がってらあ。女優の望月優子さんも似たような境遇だぜ。

福子

そうだよねえ。身の上話は本人が悲惨がるほど、人にとっては悲惨ではないんだよねえ。それより、ほらっ、佐々木千里の取材はどうしたのさあ。

誉

いけねえ、浅草の泥鰯屋の二階の奥座敷を予約してあるんだった。智恵、佐々木千里の取材だよ。いいか、うまいこといっておだてて写真撮るんだぞ。

智恵

任しときなつて。おだてて写真撮るのはおてのもんさ。やっぱり、おだててたのかい。

福子

ちよいとアコーデオンを弾かせてもらうよ。

智恵

智恵、アコーデオンを弾くと「上海帰りのリル」を唄う。

## 五 新宿 角筈 ムーランルージュ楽屋 経営者室

ちよび髭を生やした佐々木千里が葉巻をくわえ、金の指輪を磨きながら、都田津々子が歌う「上海帰りのリル」の唄を聴いている。

千里

（拍手をして）まあ、素人の唄にしてはいいずらよ。けどなあ、なにも上海帰りのリルをわざわざ歌にしなくても、いまの日本は、大陸からの引揚げ者や香港や上海帰りの余計者で溢れてるんだぜ。だけど、津村謙の「上海帰りのリル」はヒット

してるずらなあ。(履歴書を読んで) ほう、都田津々子さんは東北の生まれなのか。

津々子

千里

ええつ、実の父は警察署長だったのか。

津々子

でも、母は父と別れてしまったのです。わたしは母と二人暮らしてました。別れた原因は母の浮気にあるんだども。

千里

まあ、この新宿角筈のムーラン・ルージュに応募してくる人は訳ありで、家庭の事情を背負ってる人が多いですからなあ。それに、履歴書にはなんとでも書けるすら。

津々子

千里

まっ、採用とするか。その幼い可憐さと美貌は嘘じゃねえすらからなあ。

津々子

はい、嘘じゃねえつす。

千里

おまえなあ、これからは嘘をつかないなどと大嘘をついたらいけないよ。嘘つきは泥棒の始まりすら。

津々子

へえ、だったら、生涯を嘘で固めてるおじさんは、立派な泥棒なんだねえ。

千里

憎つたらしい娘っ子だよなあ。おまえも生涯を嘘で固めることになるんだよ。俺はムーラン・ルージュの主宰者なんだ。嘘のひとつつふたつがなんなんだ。

津々子

それは理屈よねえ。

千里

戦後、ムーラン・ルージュを再建したのはこの俺なんだ。

津々子

へえ。

千里

なんだ、荷物は風呂敷包みひとつなのか。

津々子

はい、いまんとは。

千里

なんだか、家出娘同然なんだよなあ。この少女雑誌の本はなんだ。おまえが読むのか。贅沢な。

津々子

はい、「鶴の恩返し」が載ってる雑誌だっぺ。母の餞別なんだあ。

千里

「鶴の恩返し」。なんでえ、そりゃ。この世の中に恩を返す奴なんているもんか。恩を仇で返す奴ばかりさ。

津々子

いづれ、財産をどっさりとかさえて田舎に帰るっぺよ。

竹上誉とカメラマンの林智恵が走り込む。

誉

いやあ、約束の時間をすっかり遅くなって。ほう、ここはムー

ラン・ルージユの経営者室ですか。立派なものだなあ。凄い、表彰状でいっぱいだなあ。あつ、あなたがムーラン・ルージユの主宰者、佐々木千里プロデューサーですね。

千　　里　　誉  
おい、こちらがプロデューサーの佐々木千里先生だ。粗相があつてはならんぞ。

智　　恵  
ほんと、ぶくぶく太ってちよび髭だわ。

千　　里　　誉  
（千里に名刺を渡して）わたし、こういった者なんです。（名刺を見て）ほう、婦人雑誌女の友の記者をしておられる竹上誉さん。その誉さんがわたしを密着取材したいと、こうおっしゃる。

千　　里　　誉  
はい。  
新宿にレビュー劇場を開場しようという発想は、大胆という  
きか無謀というべきか。また、そんな取材かな。

千　　里　　誉  
はい、まあ。  
確かに昭和初期の新宿は、洋画封切りの専門館としてインテリ層や大学生の支持を集めた武蔵野館、邦画封切館の帝国館や帝都座、二番館の昭和座など基本的に映画館の街だった。レビュー劇場などはとてもとでもだった、だろ。

千　　里　　誉  
はい。  
そういう意味ではエロ・グロ・ナンセンスの風潮とレビュー流行の時流に乗ろうとしたとはいえ、新宿で、しかも個人資本でレビュー劇場を経営しようとする計画は無謀だった。

千　　里　　誉  
はい。  
だが、その無謀に挑戦し勝利を手にしたのが、この佐々木千里という男だった。

千　　里　　誉  
はい。昭和の芸能史にその名を残したムーラン・ルージユの歴史は佐々木千里を抜きに語ることはできない。それが取材の意図です。誉はあなたです。

千　　里　　誉  
そうなるのかねえ。そうです、わたしがなにかと悪名で評判の佐々木千里です。なかに悪名で結構。悪名は無名に勝るといいますからなあ。

千　　里　　誉  
佐々木千里さんこそ、まさしく戦後の誉ですなあ。  
戦後、婦人雑誌は読者層が増えて、儲かっているらしいですなあ。

千　　里　　誉  
はい、戦後はなにかと便利になって、主婦が暇を持て余してお



りますからなあ。

千里 ああ、ムーラン・ルージュもよく笑う女の客でいっぱいだ。女の客は役者が台詞をとちっても笑いますからなあ。なにがそんなにおかしいんだかねえ。役者が吹いても笑うんだから。戦後になって、なにかよっぽど嬉しいことがあったんでしょなあ。

千里 で、婦人雑誌女の友もわたしを取材なさりたいのかな。

誉 はい、ぜひ、来月号で特集を組みたいと企画しております。ここでかな。

誉 えっ。

千里 取材はここでかな。

誉 いえ。浅草の泥鰯屋の二階の座敷を予約しております。

千里 浅草の泥鰯屋。

誉 いえ、いえいえ、二次会は銀座四丁目の一流クラブを予約してございまして、はい。

千里 ほう。銀座四丁目の一流クラブねえ。

智恵 (撮って) なんだい、まんざらでもない顔をしちゃってさあ。

津々子 根は正直な男なんだねえ。

津々子 あの、おらはどうすればいいか。

津々子 あっ、ああっ、二階の踊り子部屋で待機してくれねえか。明日からは唄と踊りの猛特訓だ。ああっ、それから、明日からはおらと喋ってはいけないよ。あたしといいなさい。いいね、おらではなくて、あたし。

津々子 おらがあたし。なんだか、おらが他人になったみてえだなあ。でも、踊り子って裸になるのかい。そんなのおらのあたしは嫌だっぺ。

「東京行進曲」が流れている。

## 六 新宿御苑 福子の自宅兼稽古場 昭和二十七年 夏

昼下がり。ラジオから「東京行進曲」が流れている。

三味線を弾いていた女将の福子が、新聞を読みながら

渋々雑誌記者竹上誉の取材を受けている。姉さん被りをした立花鈴子（二十五歳）が「東京行進曲」を歌いながら、はたきをかけている。

福子 鈴子、はたきをかけながらドラムを叩く真似はやめなさい。ほう、鈴子ちゃんはドラムを叩くのかい。

福子 へえ、佐々木千里と新宿ムーラン・ルージュを婦人雑誌で特集をなさるのかい。そんな特集はもう古いんじゃないのかねえ。もつと、この時代らしく講和条約調印とか李承晩ラインの設定とかの内幕を特集したらどうなんだい。暑いねえ、昭和二十七年も夏の盛りだものねえ。ごらん、どこもかしこも暑さでげんなりしているよ。

鈴子 げんなり。そうよ、講和条約は米軍駐留のもとでの条件付き独立らしいじゃないか。日本はいつまでたっても独立できないんじゃないのかい。げんなりだわ。

福子 あんた、そんな知識をどこで仕入れたのさ。あつ、あんた、またわたしの買ったばかりの婦人雑誌を、こっそり隠し読みしたんだね。

鈴子 だって、座敷の座卓の上に放りっぱなしなんだもの。

福子 おだまり。座卓の上に隠してたのさ。ああ、これではあぶなっかしくて、財布なんかそこいらには置いとけやしないよ。あれっ、この新聞、切り取ってあるよ。

誉 （笑って）戦後も七年かあ。女は言い訳と言いつれと屁理屈がうまくなりましたよなあ。

鈴子 だって、婦人参政権獲得の道も現実化したじゃないか。

福子 鈴子、台所のかまどの火の具合を見て来ておくれ。味噌汁と煮しめの味見はしなくていいからね。

鈴子、「はあい」と返事をしてドラムを叩く真似をして去る。鈴子のエプロンのポケットから、新聞の切り抜きが二枚落ちる。

福子 （切り抜きを拾って）鈴子ちゃん、新聞を切り抜いたのはあなたなんだね。まったく油断も隙もありやしない。

誉 だけど、盗み見と盗み食いは下働きの女の特権だからなあ。

福子 あの子はね、どんぶり飯の山盛りで味見をするんだよ。あなた

も、我が家の下働きの味見はしないで頂戴ね。つまみ食いもいけませんからね。(新聞の切り抜きを読んで) なになにに、ムーラン・ルージュ舞踏団第一期女子研究生募集。へえ、資格、年齢十五歳ヨリ廿歳マデ、身長五尺以上。ほう、審査、昭和二十一年六月十日午前九時ヨリ。なんだい、随分昔の六年も前の新聞の広告記事じゃないか。

誉

どれどれ。(切り抜きを取って読む) 審査場所、新宿ムーラン・ルージュ劇場内。携帯品、履歴書、写真、水着又は洋下着。弁当持参。ほう、洋下着ってのは西洋の下着のことかなあ。

福子

あの娘もムーラン・ルージュに応募するつもりだったんだねえ。

誉

あれっ、これは今日の新聞の広告記事の切り抜きですよ。(切り抜きを読んで) 関東映画ニューフェイスオーディション、戦後の新たなスター俳優を発掘するために開催、か。ほう、鈴子ちゃんは映画のニューフェイスにも応募するつもりなのか。へえ、それでドラマもやってるのか。

福子

鈴子は映画女優になってドラマを叩くつもりなのかい。突拍子もないことを考える娘だよねえ。

誉

しかしなあ、建前はなんでも平等の時代だからなあ。だからなによ。えっ、なによ。なんなのよ。

誉

当然、鈴子ちゃんにもドラマを叩く権利も、つまみ食いの権利もありますよ。娘なら、だれだっって流行歌手や映画の女優には憧れるものだからねえ。お師匠さんも娘時代はスターに憧れたんじゃないのかなあ。

福子

だけどいいかい。鈴子はね、この家の年期奉公が開けたら、故郷の信州小諸で許嫁の堅気のいい人が待っているんですからね。祝言には村中の親戚知人が紋付き袴で集まるらしいんですからね。三日三晩の宴会らしいんだから。人間、堅気で生きられるものなら堅気で生きるのがなによりさ。

誉

なんだか、話が昔浅草の六区の封切館で観た古い邦画の活動写真みたいだよなあ。都会でいろいろあった女が、なんにもなかった堅気の顔をして故郷で嫁ぐんだ。笑って、おぼこ娘の顔をして嫁ぐんだ。ああ、女は怖い怖い。

福子

おだまり。ねえ、佐々木千里が個人資本で新宿にレビュー劇場を開場するってのはほんとなのかい。

誉

はい。浅草オペラ時代から脚本と演出を手掛け、浅草ムーラン・ルージュを脚本主義で成功させた佐々木千里ですからなあ。

福子

そう。他人には厳しく、嫉妬深い男だからねえ。

誉

佐々木千里には、浅草のカフェ広養軒のマスターの顔もありますからなあ。

福子

ああ、広養軒は浅草でも一、二を誇る老舗カフェで手堅い店として評判だった。

誉

客筋も大半が文化人やサラリーマン、学生などのインテリ層が中心だ。

福子

ええ。

誉

女給も美人揃いだった。なかでも経営者の一人娘お絹は、大正時代に浅草三大美人の一人と褒めそやされる、それはそれは美人だった。

福子

らしいわねえ。

誉

このお絹が一目惚れして、連日劇場に通い詰めた挙句に、ついに婿養子に迎えた相手が浅草オペラ俳優の佐々木千里だった。新宿にエロ・グロ・ナンセンスのストリップのレビュー劇場があ。

福子

そいつだけは、どんなことがあってもあたしが許さないからね。「七人の侍」も野盗から村を守るために百姓に雇われるそужやないか。あたいたちも七人の女侍になって、佐々木千里から唄と踊りで新宿ムーラン・ルージュを守ろうじやないか。こいつは特集記事になるぜ。新宿に「七人の女侍」かあ。

誉

で、佐々木千里はどこでなにをしてるのさ。

福子

鈴子が、お盆を持って入って来る。

誉

鈴子ちゃん、ドラムを叩いてごらんな。「七人の女侍」のオーデイションだよ。

鈴子

へえ、ここもオーデイションかあ。時代は、オーデイション流行りなんだなあ。

「東京行進曲」が流れる。

鈴子が、「東京行進曲」をドラムで叩き唄う。

七 浅草 泥鰯屋 二階 奥座敷

夕暮れである。遠くからは豆腐屋の笛の音がしている。  
佐々木千里と都田津々子が、七輪の泥鰯鍋を挟んで座  
っている。

千里

津々子ちゃん。この泥鰯屋の泥鰯鍋はね、浅草でも名物なんだ  
お食べ、たんとお食べ。雷門の近くの寿司屋か天ぷら屋、鰻屋  
か蕎麦屋でもよかったんだけど、せっかく婦人雑誌記者の竹  
上蒼が泥鰯鍋をご馳走してくれると聞いたものだからさあ、  
まあ、泥鰯鍋もそれなりにおつなものさ。

津々子

おらの東北の田舎では、おつとうがおら家の前の川で笹で泥  
鰯っこを掬っただ。

千里

なんない、出雲だけではなくて、東北の田舎にも泥鰯掬いはあ  
るのかい。

津々子

なにかといえ、おら家の晩飯は稗の飯と泥鰯汁だ。おら、  
泥鰯っこは根っから嫌いだ。ああ、正月におつかあがこさえて  
くれた鮎っこの甘露煮は、まんずはあ、うまかったべなあ。お  
ら、あの味がなにより好きだ。

千里

おらではなくてわたしだろう。ねえ、踊り子で稼いで親孝行し  
てはどうなのさ。

津々子

だけど、おらのわたしは踊り子だけは嫌だかんね。裸だけは嫌  
だかんね。

千里

けっ、おらのわたしだっついていいやがる、憎ったらしい娘っ子だ  
なあ。裸といたってね、テクニクでちらっと裸みたいに踊  
るだけなんだから。

津々子

嫌だったら嫌だかんね。ちらっとでも裸は嫌だかんね。あつ、  
蝙蝠、マスター、夕焼け空に蝙蝠がいっぱい飛んでいるよ。

千里

あいな、東京浅草の暮れそで暮れない黄昏時の夏の夕暮れに  
はな、蝙蝠がいっぱい飛ぶぞらよ。なあ、津々子ちゃん、俺は  
明治二十四年に静岡県御殿場に生まれたんだ。旧制中学を

卒業して軍楽隊養成の陸軍戸山学校へ入隊したんだ。俺の本名はなあ。

津々子

知ってるよ。マスターの本名は平吉だ、佐々木平吉。知ってるよ、本名の平吉が気に入らなくて、偽名の千里で通してるんだってねえ。

千里

どうして知ってるんだ。

津々子

あらっ、楽屋でモギリのおばさんや下足番のおじさんのもつぱらの噂だもん。悪事千里を走るともいつてたわよねえ。ねえ、これどんな意味なのさ。

千里

そうかい、悪事千里をねえ。悪い行いは、すぐに世間に知れ渡るといふ意味さ。だけど、戸山学校時代、俺が吹いたラッパは千里まで聴こえたんだ、それで千里さ。(泣いて)平吉って、日本橋か神田かどつかの卸問屋の丁稚か小僧みたいな名前じゃないか。親父も、せめて平八郎とか大吉とか、もっと出世するような名前にしてくればよかったんだ。だけど、俺は偽名の千里の名前でここまで出世したんだからねえ。(もっと泣いて)津々子ちゃん、あんたさえ明日から踊り子をやってくれれば、俺はもっと出世することになるんだ。ねえ、津々子ちゃん。いくら泣き落としても、おらは裸の踊り子だけは嫌だかんね。(けろっと泣き止んで)そうかい、俺の泣き落としにかからない女もいるんだなあ。だったら好きにしま。

津々子

千里

津々子

千里

津々子

千里

津々子

千里

津々子

千里

津々子

千里

津々子

ああ、性格も体格もとつぽいんだよ。裸の踊り子にはもってこいだよ。

もう、プロデューサーはしっこいねえ。

千里

しつこくて、嫌らしくて、ねばっこい。プロデューサーはこうでなくては務まらないのさ。

八 新宿御苑 福子の自宅兼稽古場 晩夏

福子が唄い、灌子が「カジノの歌」の手踊りである。

福子

(唄つて)ア チョイ 指をもたげて チョ チョ シイ シイ  
イ さあさあ おいでおいで チョ チョ チョ チョ  
つとも ためらわないで チョ チョ シイ シイ さあさあ  
あ おいでおいで。

大輔、勉、英二、武、純一郎が大喝采である。

福子

これがカジノ・フォーリーで唄っていた、サトウ・ハチローの  
カジノの歌さ。カジノ・フォーリーは名称だけは国際的なんだ。  
パリで有名なフォーリー・ベルジュールとカジノ・ド・パリの  
ふたつをくつつけて、日本の訛りを入れたのがカジノ・フォー  
リーさ。もつとも、やっていた連中は嘲笑して、インチキレビ  
ューとっていたわよねえ。

灌子

ええ。日本最初のレビュー劇場、管弦楽団二十数名による大レ  
ビュー団出現、入場料は四十銭。いまから二十七年も前の昭和  
の始めのお話しさ。

だけど、あんたの踊り、なんだか艶がなくなったわよねえ。

福子

(武の頬に蝙蝠を描きながら) ああ、藪医者に肝臓に悪いから  
と、焼酎の一升瓶のラツパ飲みを辞めさせられてから、なんだ  
かねえ。ああ、いつまでも暑いわねえ、今年の夏も過ぎてるん  
だねえ。

福子

あんた、まさか不治の病じゃないんだろうねえ。

灌子

まさかあ。でも、人間、寿命というものはあるのかもしれない  
ねえ。あたいの内縁の亭主だった舞台監督の男も、あたいの後  
輩の娘と手に手を取って、北海道の山の中の飯場に駆け落ち  
さ。今頃は駆け落ちした二人も、別れたくて、さぞ苦勞してる

んだらうねえ。男と女の関係は、くっついたらすぐに飽きるからねえ。まつ、どつちにしてもあたしは天涯孤独だけどさあ。あんた、故郷はどこだったっけねえ。

浅草から東武東上線に乗って、終点の寄居駅。終点の田舎町寄居から、また乗り合いバスに乗って小一時間もかかる、あんな故郷なんてとつくに捨ててらい。親戚知人や親兄弟も帰って来るなどいいやがる。ふんつ、ストリップのどこがいけないというのさ。人間、生まれた時は裸じゃないか、ねえ。もう、新宿の歌舞伎町裏のぼろアパートがあたいの故郷なのさ。あたいの遺産はぼろアパートの化粧箱に入ってたあ。

えっ、あんたに遺産があつたのかい。預金通帳なんかの遺産なのかい。あつ、あんた、もしかしたら、箆筒貯金もしてるんじゃないのかい。

箆筒貯金は逃げた男に貢いで、すっからかんさ。箆筒には質札だけが入ってたあ。ああ、男に貢ぐあたいの性分は一生直らないんだらうねえ。遺産といつても、化粧箱に入ってる遺産は太田胃酸だけだけどさあ。ああ、東京の下町に奉公が決まって、東武東上線で上京して、浅草の土を踏んだ時は嬉しかったなあ。だけど、住み込みの寮が酷くてさあ。とんずらさ。よしっ、これであたも立派なこうもり安だ。さあ、玄治店をやったんさい。

やったんさいだって、やっぱりやるのかい。嫌だなあ。なにいつてるんだい。福子お師匠さんのレビューを、あんたらの玄治店で盛り上げるんだよ。佐々木千里のストリップ劇場なんかにかけてたまるかい。さあ、やったんさい。大輔ちゃん、音だよ、音。

大輔が蓄音機を回す。

(芝居掛かって) え、御新造さんえ、おかみさんえ、お富さんえ、いやさ、これ、お富、久しぶりだなあ。

そういうお前は。  
与三郎だ。  
ええつ。

お主(のし) やあ、おれを見忘れたか。  
えええ。

福子  
灌子

福子

灌子

純一郎  
灌子

純一郎

勉  
純一郎

勉  
純一郎

勉  
純一郎



純一郎

灌子

純一郎

英二

灌子

大輔

福子

灌子

福子

灌子

福子

灌子

福子

灌子

しがねえ恋の情けが仇(あだ) 命の綱の切れたのを どう取り留めてか 木更津から めぐる月日も三年(みとせ) 越し江戸の親にや勘当うけ 抛処(よんどころ)なく鎌倉の 谷七郷(やつしちごう)は喰い詰めても 面(つら)に受けたる看板の 疵(きず)が勿怪(もつけ)の幸いに 切られ与三と異名を取り 押借(おしが)り強請(ゆす)りも習おうより 慣れた時代(じでえ)の源氏店(げんじだな) その白化(しらば)けか黒堀(くろべえ)に 格子造りの囲いもの 死んだと思つたお富(とみ) あ お釈迦(しやくか)さまでも気がつくめえ よくまあお主(ぬし)やあ 達者(たつしや)でいたなあ 安(やす)いこれじゃあ一分(いちぶ)じゃあ帰(かへ)られめえ。

まあ、いくら稽古(けいこ)をしてもへたつびいだことねえ。これではまるで、おふざけだけのアチャラカだよ。

アチャラカ。アチャラカとはなんだ。

アチャラカとは、どたばた喜劇(きげき)のことをいうのさ。

へえ、やつぱり早稲田(わせだ)大学の学生(がくせい)さんは学(まな)があるわよねえ。でも、こんなアチャラカ(acha-raka)コント(contrast)で、佐々木(ささき)千里(せんり)のストリップ(strip)ショーより客(きやく)を呼(よ)べるのかしらねえ。それにあんた、あんたの衣装(いしょう)は大正(たいしょう)デモクラシー(democracy)時代のルパシカ(ropashika)の一張羅(いちやうら)しかないのかい。なんだい、ルパシカ(ropashika)は流行(りやうぎやう)の最先端(さいせんぱん)だつて褒(ほ)めてくれたのは、灌子(かんこ)姐(あね)さん、あんたじゃなかったのかい。

(読むように)新宿(しんじゆ)のムーラン・ルージュ(rouge)のかたすみ(すみ)にゆうまぐれ居(ゐ)て我(われ)は泣(な)きけり。

なんなんだよ、それは。

昭和(しやうわ)九年(くわんねん)に、医者(いしや)で歌人(かじん)の斎藤(さいとう)茂吉(しげきち)がムーラン・ルージュ(rouge)で長谷川(ながはがわ)伸原(のぶはら)作(さく)の「直八(ちやちや)子(こ)供(ご)旅(りよ)」の初日(はつじつ)を観(み)た感想(かんさう)を詠(よ)んだ歌(うた)だよ。おセンチ(ouchi)な人(ひと)だよねえ。

へえ。

あれは、二・二六(に・にろく)事件(じけん)が過ぎ(すぎ)た昭和(しやうわ)十一年(じゅういちねん)の春(はる)五月(ごご)だった。えつ。

満員(まんいん)の客席(きやくせき)だったわ。最後のバラエティ(バラエてぃ)ショーが終(お)わる直前(ちか)前(まへ)、突然(とつぜん)客席(きやくせき)にいた軍服(きんぷく)姿(すがた)の兵隊(へいたい)七人(しちにん)が立ち上(た)がって、直立(ちか)したまま舞台(まいだい)の踊(お)り子(こ)やコント(contrast)の芸人(げいじん)に向(むか)かって万歳(ばんざい)三唱(さんしょう)をして、そのまま挙手(きよて)の敬礼(けいれい)をした。泣(な)いている兵隊(へいたい)さんもいたよねえ。灌子(かんこ)ちゃん、覚(おぼ)えているかい。

ええ。あの人(ひと)たちは、満州(まんしゅう)防衛(ぼうえい)の命(いのち)を受けて八日(やっぴつ)には品川(しんがわ)から

満州へと渡ることになっていた、東京第一師団の新兵さんたちだったのよねえ。

福子 次の瞬間には、腕章を巻いた憲兵が飛び込んで来て、兵隊に平手打ちをして引っ張って行った。

灌子 ええ、ムーラン・ルージュの踊り子のだれもが兵隊たちの処罰を心配してたわ。

福子 そう。二、三日後の新聞を大きく飾った第一師団が満州へ渡る記事の中に兵隊たちの名前を見付けると、安堵とも悲痛ともいえない複雑な気持ちに襲われたものだよわねえ。

灌子 日本はゆつくりと、だけど、確実に不穏な時代へと進んでいたのよねえ。

大輔 なんなんだよ、しんみりしちゃってよう。

灌子 コントには、人を泣かせるだけの力もあるということはいいたかったのさ。ねえ、福子お師匠さん。

福子 そうだねえ。ムーラン・ルージュの観客は、コントの風刺にもにやりとする教養と知性、ユーモアのセンスがあったわよねえ。

灌子 嫌な時代だったけど、ムーラン・ルージュにとってはいい時代だったってことさ。

チラシを持った誉と智恵が、飛び込んでくる。

誉 いやあ、挨拶もなしに、福子お師匠さんの稽古場にまで押しかけちゃって悪いんだけどさあ。

灌子 なんなのさ、あんたら。なんの挨拶もなしに。

智恵 いえね、かつては皇室の庭園だった夏の新宿御苑には、くちなしの白い花やさるすべりの赤い花が咲き乱れて壮観らしいから、婦人雑誌女の友に特集しようと、新宿駅までは国鉄の中央線でやって来たのさ。

誉 こいつが、地下鉄の丸ノ内線は混んでて、暑くて嫌だなんていやがるからさあ。

智恵 そうしたら、新宿駅の東口の階段を上がったところで、ピエロの恰好をした佐々木千里と踊り子のメイクと衣装のままのストリップの踊り子が、レビューのビラ配りをしてやがるのさ。それで、慌てて、福子お師匠さんの新宿御苑の「自宅まで押しかけて来たわけさあ。

智恵  
灌子  
（チラシを渡して）これだ、これ。これがそのチラシだよ。  
（読んで）踊り子八十人による、歌と踊りの世紀の美の祭典。

福子  
灌子  
新宿の夜空に再び輝く、ムーラン・ルージュ。  
日付は。  
えっ。

福子  
灌子  
佐々木千里のレビューは、いつからいつまでやるんだい。  
（読んで）新装なった新ムーラン・ルージュ。時期は昭和二十  
八年春四月。来年の春の四月だよ。ねっ、佐々木千里はムーラ  
ン・ルージュを新装したのかい。

英二  
純一郎  
来年の春四月。俺は卒論にムーラン・ルージュを書いて、早稲  
田大学を卒業してる季節だぜ。

武  
大輔  
俺だって、ミシンのセールスマンは卒業して、課長になって丸  
の内の本社勤めになってるはずだ。

大輔  
武  
俺も、日本橋の呉服問屋で丁稚から番頭さんになってらあ。  
おまえは、日本橋の呉服問屋の帳場の金のネコババがばれて  
る頃さ。

勉  
灌子  
（襟を直しながら）おだまり。若気の至りはだれにだってある  
もんなのさ。頑固な親父も跡継ぎ息子を、きっと許してくれて  
るはずさ、きっとそうだよ。

灌子  
智恵  
さあ、それまでは玄治店の稽古に励むとしようじゃないか。さ  
あ、やったんさい。

智恵  
灌子  
玄治店。へえ、ここでは歌舞伎の稽古もやるんだねえ。誉さん、  
ここには婦人雑誌の特集のネタが、いっぱい転がってるわよ  
ねえ。

誉  
灌子  
智恵、いつそ、おまえも福子お師匠さんに弟子入りしたらどう  
なんだい。

鈴子が、手紙を持って飛び込んで来る。

鈴子  
大輔  
あたし、あたし、関東映画のニューフェイスのオーディション  
の一次試験に合格しちゃったあ。どうしよう、あたし、どうし  
よう。二次試験は銀座有楽町の映画会社の本社の五階で、面接  
と台詞を読むテストなんだって。社長は勿論、いろいろな作品  
を撮っている有名な映画監督が審査員なんだって。どうしよ  
う、あたしどうしよう。鈴子、困っちゃう。  
ちつとも、困ってなんかいないじゃないか。

純一郎

ああ、俺は映画監督になりたかったんだよなあ。

智恵、アコーディオンを弾くと「ムーラン・ルージュの唄」を歌い踊る。

九 新ムーラン・ルージュ 稽古場 昭和二十八年三月

佐々木千里が廊下から教室の踊り子たちの稽古を見ている。竹上誉が取材をしている。遠くで、宮城まり子が唄う「毒消しやいらんかね」が流れている。

千里 (唄って) 毒消しやいらんかねえ、か。まったく、俺を皮肉ってるような唄が流行るじゃねえか。

誉 ですよねえ。マスターは猥褻な毒の存在ですものねえ。なんだって、俺が猥褻な毒の存在だったのか。

千里 いえっ、時代が毒で固まってるという意味ですよ。昭和も二十八年ともなると、時代の毒消しがいるのかもしれないなあ。さあ、来月四月は、いよいよ新ムーラン・ルージュの新装開店だ。四百人の中から選りすぐった踊り子八十人のレビューすらよ。俺は戦後の新宿にムーラン・ルージュを復活させた男なんだ。

誉 それで、あの、大正十年の、東京オペラ座の解散、ですか。ああ、解散の理由は座長が過労から度々健康を害したことや、地方巡業の際に地元の興行師と金銭トラブルが絶えなかったことすら。第一次世界大戦終結による全国的な不況も解散の理由のひとつだったよ。

千里 第一次世界大戦ですか。そうだ、大正デモクラシーの機運と第一次世界大戦の好景気を足したような民衆娯楽の隆盛を生んだ。その中でも浅草オペラは、十九世紀の総合芸術であるオペラを、民衆娯楽のメッカだった浅草風に改革して熱狂的な人気を誇った。あんた、「コロツケの唄」を知ってるかい。「コロツケの唄」を歌って「ワイフ貰って嬉しかったが、いつも出てくるおかずはコロ

誉  
千里 ツケ、今日もコロツケ、明日もコロツケ。これじゃあ年がら年中コロツケ、コロツケー」。これが「コロツケの唄」さ。浅草オペラで流行った唄さ。浅草オペラの熱狂的なファンを世間ではペラゴロ、オペラ界のゴロツキと揶揄していたが、俺たちはオペラ界のジゴロだといってたずら。

誉  
千里 ほう、浅草のジゴロですか。

千里 ああ。ジゴロとは、女にやさしくして、女のいいなりになんでもしてやって、女から巧みに金を巻き上げて、博打と遊興で生活する優男のことさ。遊び人さ。

誉  
千里 ヒモ、男妾、つばめ、スケコマシ、プレイボーイなどともいいますなあ。

千里 ああ、俺は浅草のジゴロだったのさ。

誉  
千里 へえ、スケコマシは顔ではないんだなあ。

千里 ふんっ、なにをいつてやがる。スケコマシにしているのは、テクニクだけなんだよ。わかるか、テクニク。さて、俺の浅草オペラのオペラ歌手としての実力だがね、陸軍軍楽隊富山学校で鍛えられただけあって、安定した歌唱力と音楽センスを持ったテナー歌手の有望株として、浅草オペラでも、すぐに重要な役を任されるようになったのさ。

誉  
千里 佐々木千里は、山師気質と芸術趣味と俗物根性を併せ持つ憤懣やるかたない男、といった人もいますかねえ。

千里 ふんっ、そいつは嫉妬、ジェラシーさ。ま、それだけ、だれもが俺の興行師としての判定眼やアイデアマンとしての才能に一目置いているということさなあ。

誉  
千里 元来が、明るくて目立ちたがり屋な性格の演劇記者だった佐々木千里が、興味を惹かれたのが浅草オペラだった。こうですなあ。

千里 ああ、そう書いて貰っても結構さ。そして、誘われるままに浅草オペラでテナー歌手さ。作曲もする、コンダクターもやる、脚本も書く、舞台で芝居をして、踊るし唄うし、なんでもやった。日本初演の「ロミオとジュリエット」でロミオを演じたのがわたしずら。

誉  
千里 えっ。ロミオ。

千里 そう、ロミオはわたし、ロミオはこの俺ずらよ。

誉  
千里 ああなたがロミオ。はあ、どんな浅草オペラだったのかなあ。

千里 だがな、浅草オペラの衰退を感じ取った俺は、東京オペラ座解

散後、浅草観音劇場の曾我廼家五九郎一座へ加入したのさ。曾我廼家五九郎には劇場やアパート経営も成功させる実業家としての手腕もあったなあ。

憧れたんですねえ。

千　　譽　　ああ。曾我廼家五九郎師匠は、普通選挙とデモクラシーに沸き立つ世の中の時代感覚を巧みに舞台に取り入れてたよなあ。

千　　譽　　そうですか。

千　　譽　　だけど、あの震災だ。

千　　譽　　えっ、震災。

千　　譽　　（泣いて）そう、関東大震災だ。大正十二年九月一日、関東大震災によって、浅草を含む東京下町地域の九割が消失した。

千　　譽　　そうでしたねえ。

千　　譽　　そして、浅草の多くの興行会社が規模縮小を迫られ、一世を風靡した浅草オペラの灯も消えてしまうのさ。

千　　譽　　はい。

千　　譽　　昭和二十年になると、米軍のB29爆撃機による東京大空襲だ。ムーラン・ルージュの座員も三十人程度まで減ったずら。

千　　譽　　ムーラン名物の踊り子たちも十人ばかりになってしまった。

千　　譽　　座員も観客もゲートル巻き坊空服姿。頭には鉄兜や防空頭巾だ。空襲警報が鳴れば直ちに上演中止だ。

千　　譽　　はい。

千　　譽　　俺は、経営権を人に譲渡して、妻のお絹と故郷の御殿場へ疎開していたからよかったです。

千　　譽　　ああ、昔はな。いまはバケベソ、オカチメンコのバケベソだよ、バケベソ。バケものが、ベソをかいている面だあな。

千　　譽　　はあ、浅草三大美人の一人お絹さんも、いまはヘチャムクレのバケベソですかあ。昔は昔、今は今か。まあ、冗談は冗談としてもだ。マスターは根っからの照れ屋ですねえ。

千　　譽　　ああ、そういうことずらよ。忘れもしねえ、五月二十五日、B29爆撃機四百七十機による大空襲でムーラン・ルージュ新宿座は焼け落ちた。俺が新宿座を手放してから、僅か三ヶ月での消失だ。俺は、商売の勘が冴えているのさ。しかしなあ、俺を待っていたのは、敗戦というさらなる苦境だったのさ。どうだい、こんなんで婦人雑誌女の友の記事にはなるのかい。

千　　譽　　ええ、まあ。ただ、これだけでは、女の読者にはちよっと艶っ

誉

千　　譽

誉

千　　譽

誉

千　　譽

誉

千　　譽

誉

千　　譽

誉

千　　譽

誉

千　　譽

誉

千　　譽

誉

千 里 ぼさとあくどさには欠けるかなあ。女の読者はスキヤンダルと毒を欲しがるからなあ。

千 里 誉 そこんところは、あんたの筆力でうまく書いてくれや。なあ。はい。

千 里 誉 あんたがよく取材をしている新宿御苑の踊りのお師匠さんなあ、なんていったっけかなあ。

千 里 誉 ああ、福子お師匠さんのことですかい。

千 里 誉 その福子が、来春の俺の俺の新ムーラン・ルージュのレビューに張り合つて、武蔵野館の隣のビルの地下でレビューとコントをやるらしいじゃねえか。

千 里 誉 さあ、はたして、どうなりますですかなあ。

千 里 誉 その福子つてのは、どんな女ずら。政治家か財界人の旦那か金貸しの因業親父かだれかの妾かなんかじゃねえのかい。

千 里 誉 そんな艶話はお師匠さんに限つては、噂にも事実にもありませんなあ。あの人の身边は、それはそれは綺麗なものですからなあ。

千 里 誉 あんた、女を知らないねえ。だいたい、日舞のお師匠さんぐらいで派手な暮らしはできないだろうが。裏には、おっかない金づるがいるんじゃないのか。

千 里 誉 さあ、でも、お弟子さんだけでも四百人からいるそうですからなあ。孫弟子やら鼻筋やらなんやかやで、月謝だけでも相当な額になりまさあな。それに、福子お師匠さんは戦争未亡人ですからなあ。

千 里 誉 戦争未亡人、それはカストリ雑誌の挿絵小説の女じゃねえか。戦争未亡人が、姑と仲が悪くて、金かなんかが原因で嫌よ嫌よと泣く泣く裸になって、男の好奇心をそそるんだ。おいっ、弟子のなかには、暇を持て余してる横丁の隠居じじいとか大店の女好きの若旦那とか、質の悪いのもいるんじゃないか。カストリ雑誌かあ。

千 里 誉 男勝り。やっぱり、福子は俺の知ってるあの福子なんだ。おいっ、どうすればその女に会うことができるんだ。金に糸目はつけないからさあ。

千 里 誉 おやつ、マスターもあのお師匠さんに興味をお持ちになったんですかい。それは、おやめになったほうが。虜になると大怪我をしますぜ。あんた、女を知らないねえ。

千 里 誉 あいつはな、あの福子はな、俺がムーラン・ルージュでストリ

ツプのショーをやるのを嫌って、辞めていった踊り子だよ。あいつ、俺を潰しにかかってやがる。

神楽坂はん子が唄う「こんなベツピン見たことない」が流れる。

十 新宿御苑 福子の自宅兼稽古場 昭和二十八年四月 昼

福子が、浴衣姿の津々子、智恵、瀧子に蓄音機から流れる「さのさ」のメロディーで、振りを付けている。

智恵

津々子

智恵

津々子

瀧子

智恵

瀧子

智恵

津々子

瀧子

智恵

瀧子

智恵

福子

もう、昭和も二十八年だったのに、「さのさ」もないもんだわよねえ。(短銃を撃つ真似をして)パンっ、パンパーンっ。なによ。それ、なんだっぺ。  
西部劇映画。ゲイリー・クーパーの「真昼の決闘」さ。都会の女は、男に混じって西部劇映画も観るんだなあ。やっぱ、ハイカラさんだよねえ。  
おだまり。あんたも福子お師匠さんに弟子入りしたのなら、女カメラマンなんか忘れて、黙って踊りを踊ってればいいんだよ。西部劇だなんて、おてんば娘なんだからねえ。  
あらっ、女カメラマンを辞めたわけではないんだからさ。わたし、福子お師匠さんをモデルにして小説を書くのよ。  
小説。へえ、女が小説を書くのかい。  
ええ、女流小説家よ。

女流小説家かあ。いいわよねえ。直木賞とか芥川賞を狙うつもりだべ。

あんた、あんたが女流小説家なんだって。

そこまでは、いくらなんでもねえ。

なんだい、まんざらでもなさそうな顔をしてさ。だけど、女流小説家とはねえ。戦後、女の仕事は増えたわよねえ。

それで、福子お師匠さん、もっとお師匠さんの生い立ちの話を聞かせて頂戴ってばさあ。

ああ。でも、あたしの生い立ちが小説になるのかねえ。



智恵

そこはそれ、あたしがうまくデフォルメするからさあ。津々子ちゃん、あんたもとうとう踊り子になっちゃったわねえ。

津々子

はい。でも、裸にならない踊り子なら踊り子も悪くはねえ。浅草を泣きながら裸足で歩いてたからさ、声を掛けて拾ってやったのさ。ねっ、津々子ちゃん、あんた、佐々木千里の泥鯱屋の座敷から、逃げ出して来たんだったわよねえ。

津々子

はい。あのマスター先生は、男でも女でも、だれでもすぐに泣き落とすから、おっかねえ。

灌子

そのマスター先生に復讐してやればいいのさ。女の復讐は、にっこり笑ってするものなのさ。さあ、いよいよ明日は福子お師匠さんの唄と踊りのレビューだよ。稽古、稽古。

「おまつとうさま、藪蕎麦でござあい。天ぶら蕎麦と盛蕎麦をお持ちしましたあ」の声。

灌子

(返事をして) はい。だけど、いくら江戸時代からの老舗の蕎麦屋とはいえ、遅い出前だわよねえ。代が変わって味は落ちたのにさあ。催促の電話をすると、いま出ましたが口癖さ。さっ、あつちで蕎麦でもたぐって、ちよつと遅いお昼とするか。津々子ちゃん、おいで。あんたの田舎のおっかさんが打った手打ちの蕎麦ほどは美味しくはないだろうけどさ、おいで。はい。

津々子

智恵さん、あんた、ほんとにお昼はいいんだね。駅前のお蕎麦だよ。あたいのおごりだよ。

灌子

ええ、朝が遅かったから。それに取材もありますから。でも、福子お師匠さんは小股の切れ上がったいい女だねえ。(灌子を撮って) あっ、灌子姐さん、シャッターチャンス。よく撮れたのかい。

灌子

ええ、そりやあもう。だって、素材がいいから。まるで婦人雑誌の表紙の日本髪の女か、黒田清輝の洋画の美人画のモデルみたいなもの。

智恵

ねえ、頭がよくて絶世の美人でさあ。ああ、天は二物を与えるものなんだねえ。才色兼備。

津々子

(咳をして) こほっ。あんたもさ、あちらこちらを放浪して、

灌子

男とも、いろんな男といろいろあつて、一昨年亡くなった「放浪記」や「浮雲」を書いた林芙美子みたいな偉い小説家になつ

ちやうのかねえ。

智恵　そこまでは、いくらなんでも。「花のいのちは短くて、苦しきことのみ多かりき」。惜しい人を亡くしたわよねえ。

灌子　やっぱり、まんざらでもないんだねえ。おいで、天ぷら蕎麦は津々子ちゃんさ。あたいは、盛蕎麦で結構さ。

福子　へえ、どこかで情が移ってるんだねえ。天涯孤独は寂しいものだよねえ。

智恵　おやつ、実感だことだわよねえ。

灌子　ねえ、浅草の仲見世まで行って、舶来の赤いおべべを買わないかい。仲見世には、あたいが馴染みにしている洋裁店があるんだよ。買ってあげるからさあ。

津々子　ええっ。でも、悪いっぺ。

智恵　新宿の伊勢丹か三越で買えばいいじゃないか。男に捨てられて、とうとう娘に貢いでやがる。

灌子　いいんだってばさあ。また、箆筒貯金を始めたのさ。昼は女給、夜はホステスをして、お金をうんと貯めて歌舞伎町裏のぼろアパートから小田急線の多摩川を越えて、向こう岸へ引っ越すつもりなんだからさあ。

津々子　ええっ、江の島か湯河原か足柄山か熱海まで引っ越すつもりだべか。

灌子　そんなに遠くへ引っ越すものかい。ほらっ、登戸の先の遊園地のある向ヶ丘遊園に引っ越すのさ。ねっ、遊園で一緒に住もうよ。美味しい中華ソバ屋や鰻屋もあるらしいからさあ。

灌子、津々子を連れて去る。

福子　養女にでもするつもりかしらねえ。で、わたしの生い立ちは、どこまで喋ってたかしらねえ。

智恵　はい。数え歳で十五の春に浅草のレビューの一座に入座する、そこまででした。

福子　でした、でした、でしたよねえ。

智恵　それから、どうなりますの。

福子　あの時代、確かに浅草は退廃の温床だったわねえ。それに、時代もまだ自由の門戸が開放されている時代ではなかったわ。深窓の華族の令嬢が運転手と恋愛をすれば、それが大問題となつて華々しく新聞を飾つたような時代ですもの。カジノの

ある浅草の興行街は、退廃の温泉のようにいわれても仕方のないことだったわよねえ。

ええ。

でも、浅草は人間的だった。当時は新進気鋭の作家だった川端康成さんや武田麟太郎さんはカジノ・フォーリーの楽屋の常連だったわ。踊り子は、気安く差し入れの握り寿司かなんかをつまみながら、川端の兄さんとか武田の兄さんという、なれなれしい呼び方をしていたわよねえ。

踊り子は、恩恵を受けていたんですねえ。

ええ。川端の兄さんは、年の暮れには踊り子を引き連れて、万世橋の万世庵へ、年越し蕎麦を食べに連れて行ってくださるのが習わしでしたわよねえ。苦楽を共にしている踊り子たちが、一年の終わりに、人生を細く長くとお蕎麦を食べながら、いままでの過酷な人生を振り返り、新年への希望を託したりするという日本の習性を、わたしはここで学んだといえるのかもしれないわよねえ。

そう。

何色にも染め変えられる、なんの特徴も個性もない白い布のような少女時代を、わたしは浅草で過ごしたのよねえ。わたしにとつて浅草はわたしのいい学校でした。チエーホフのわたしの大学さ。

そう、チエーホフのわたしの大学。少女時代を浅草のいい学校で過ごした、福子お師匠さんのこのうえもなく懐かしくも嬉しい回顧ですか。羨ましい限りですわよねえ。

一杯のお蕎麦を友達と二人で食べて、蕎麦湯をがぶがぶと飲んで一日を過ごす。そんな貧しい生活が心の豊かさの宝であることを学びましたのさ。ちよつと与太者ぶった兄さんとか、サザエ売りのおじさんとか、天秤棒を担いで鰯や鱈の魚を売る粹な鉢巻のお兄さん、横丁の裏の短い畳屋さん、気取った円タクの運転手、人力車を引く苦学生。どの人も、一歩浅草の六区に足を踏み入れれば、兄弟のようでしたわよねえ。そうですか。

浅草に住む人は、浅草という土地柄をとて誇りに思っていて、だれかに間違いがあれば助け合い、庇い合い、その人を力づけずにはいられないといった按配で、多くの人が浅草を懐かしむのは、浅草六区の人が、信頼と友情に結ばれたサロンの

智恵

福子

智恵

福子

智恵

福子

智恵

福子

智恵

福子

智恵

人だったからではないでしょうか。

福子

複雑で、愛情から縁遠い環境に育ったわたしにとって、浅草の私たちの温かさは、身に堪えることがあまりにも多かったのです。もう、宜しいかしら。

智恵

えっ。

福子

わたし、明日に備えてやらなければいけないことがあるのはあ。

福子

わたしにとっては、明日は武蔵の巖流島の決闘なのよ。

智恵

へえ、すると、あのぶくぶくと太ったちよび髭の佐々木千里が、佐々木小次郎になるのか。決闘にはバックミュージックがいるわよねえ。ねえ、「真昼の決闘」はいい映画だったわよねえ。ゲイリー・クーパーもいいけど、恋人役のグレイス・ケリーがまたいいのよねえ。主題歌の「ハイ・ヌーン」にはジーンとしたわよねえ。この曲はラストシーンのためにあったのねえ。

智恵、アコーディオンで映画「真昼の決闘」のテーマ曲

「ハイ・ヌーン」を弾き、英語で唄う。

サンングラスをして、洋風の恰好をした鈴子が台本を握って走って来る。

鈴子

ねえっ、あたし、ニューフェイスのオーディションの二次試験にも合格しちゃった。どうしよう、あたしどうしよう、鈴子、困っちゃう。

智恵

へえ、困っちゃうの。

あたし、お盆に封切る映画の主役の恋人役に抜擢されたわ。あたしが裸になるシーンもあるみたいだけど、あたし、構わない、脱ぐわ。その若い監督の次の作品は「肉体の門」に決定してるらしいからねえ。あたしが、仲間から裸にされて、半殺しの宙吊りにされるリンチの場面があるんだって。

智恵

へえ、また「肉体の門」をやるのかい。映画会社はこの映画会社も企画には困ってるらしいわねえ。

鈴子

でも「肉体の門」はいつやっても、そこそこ客が入るらしいから。

智恵

えっ。あなた、その若い監督に騙されてるだけじゃないのかい。智恵さん。

福子

智恵

わたしもいろいろな映画女優をインタビュしたけどね、あなたみたいにオーラも知性もない人はいなかったわよねえ。

福子

あなた、どうせ、若い監督に騙されて、捨てられるのが落ちさ。智恵さん、わたし、そろそろ。

智恵

ああ、明日に備えてやらなければいけないことがあるっておっしゃってましたわよねえ。

福子

(鈴子へ) あなた。ねえ、鈴子。

鈴子

えっ。

福子

若気の至りは一生付き纏うものなのよ。

福子、去る。

智恵

実感だわよねえ。

鈴子

さあ、ドラムの稽古、稽古。

鈴子、ドラムで「ハイ・ヌーン」を叩き、英語で唄う。

十一 新宿武蔵野館の隣のビル 地下 昭和二十八年 四月

ドラムが置いてある。壁には「禁じられた遊び」「シーン」「地獄門」などの封切られた映画のポスターが貼ってある。浴衣姿の津々子、智恵、瀧子がいる。智恵がクラシックギターで「禁じられた遊び」を弾いている。

瀧子

おやつ、智恵さん。アコーディオンじゃないのかい。

智恵

「禁じられた遊び」は、やっぱりクラシックギターじゃないとねえ。ああ、ルネ・クレマン監督はいいねえ。ベネチア国際映画祭で金獅子賞にアカデミー賞だものねえ。

津々子

あたしも映画を観てみたいなあ。

瀧子

おやめ、映画を観る娘は不良になるんだからさあ、おやめ。なんなんだい、あの「赤線地帯」という映画はさあ、いかがわしいったらありやしない。津々子、あんないかがわしい映画を観るのなら、お小遣いはあげやしないからねえ、わかってるんだ

ろうねえ。

智恵

だけど「東京物語」なら、観せてもいいんじゃないかしら。

瀧子

あれは退屈な映画でねえ、チャンバラもアクションもありやしない。

智恵

ここ、なんだか、かび臭いわよねえ。へえ、ここが武蔵野館の隣のビルの地下にある劇場の楽屋なのかあ。アンダーグラウンドかあ。

瀧子

この劇場で、ほんとに福子お師匠さんの踊りとコントをやるのかしらねえ。だけど、佐々木千里の新ムーラン・ルージュは、客の列が武蔵野館の先まで並んでいるらしいじゃないかさ。

智恵

ええ。行列は武蔵野通りの南端の新ムーラン・ルージュから東端まで一直線に並び、それが折れて新宿駅東口まで並び、さらにその行列が折り返しているというから凄いわねえ。

瀧子

座席数は四百三十席ってんだから、紀伊國屋書店ビル四階の紀伊國屋ホールとは同じ規模じゃないのかさ。張り合ってるつもりじゃないのかねえ。

智恵

女子大生時代のわたしもそうだったわよねえ。紀伊國屋書店で新刊書に眼を通して、懐に余裕があるなら高野のフルーツパーラーとか、中村屋で一円のインド・カレーを食べたいけど、武蔵野館裏の通称「ラジオと新聞の店」で我慢するのよねえ。ラジオと新聞の店。

津々子  
智恵

ええ、店にラジオと新聞が置いてあるの。カレーを食べながら、流行歌を聴き、ニュースを読むの。カレーの大盛りが二十五銭へえ。

津々子  
智恵

店を出て、夕暮れの空を見上げれば、ムーラン・ルージュの赤い風車が「こっちへおいで、こっちへおいで」と手招きをしているの。そうだ、浮いたお金でムーラン・ルージュの行列に並んで切符を買おう。

津々子

新宿駅東口のムーラン・ルージュかあ。

瀧子

なにせ、座敷数も消防法も無視して、立ち見客を詰め込めるだけ詰め込めば、倍の八百人は入るってんで、佐々木千里の奴、とにかく入れられる客は入れてしまえってねえ、それはそれは活況で賑わっていたんだってばさあ。

津々子

悪口陰口は言うより言われる人になれ。マスターの口癖さ。だけど、どんなお客さんだったんだろうなあ。

智恵

制服制帽の大学生、ロングスカートの娘、子供を連れて百貨店に來た若奥様、長髪に袴姿の芸術家然とした男、派手な身なりのカフェの女給。ああ、助監督時代の黒澤明もいたらしいわねえ。シャッターチャンスでいっぱいだったよ。あの時代にカメラさえ持っていればなあ。

津々子

へえ。

智恵

東口にくらべ南口は少し野暮ったく、風呂敷の包みを背負ったハンチング帽の商人風、弁当箱を持った菜っ葉服の工員などが多かったわよねえ。女子大帰りに甲州街道の陸橋に立つと、高いビルなど稀な夜空に、赤い風車の灯りがゆっくりと回っているのが見える。陸橋の階段を降りれば、すぐそこにムラン・ルージュがある。あたし、なんだかドキドキしてさあ。

浴衣姿の鈴子が走って来る。

鈴子

なんだい、ここで福子お師匠さんのショーの踊りをやるんじゃないのかい。

灌子

おや、映画スターの登場だよ。あんた、お盆に封切る映画の撮影はどうしたのさあ。チーフ助監督から監督になった映画監督とはうまくやってるのかい。

鈴子

それが、監督がテレビ局に引き抜かれちゃってさあ。

灌子

引き抜かれた。ああ、テレビ局は本格放送を開始して、あちこちの映画会社から人材を引き抜いているらしいからねえ。大相撲の実況中継やら力道山のプロレス中継も始まるとの噂さあね。映画も、せっかく、シネマスコープ総天然色カラーになったのにねえ。

新橋や銀座の街頭テレビは黒山の人だかりなんだってねえ。

灌子

あんた、捨てられたんだねえ。

鈴子

うん。結局は、捨てられたことになるのかしらねえ。

灌子

立派に捨てられたのさ。まあ、そんなあんたでも拾ってくれる男がいるかもしれないよ。捨て猫だって拾う人はいるんだからさあ。まっ、しっかり、お励みよ。

でも、どうして捨てられたのかなあ。

鈴子

飽きられただけのことさ。なんだい、あんた、浴衣なんか着こ

灌子

しめしちゃってさあ。サングラスとアメリカ映画のハリウッドスターみたいな恰好はどうしたのさ。

鈴子

結局、福子お師匠さんに拾われちゃったのさ。元の木阿弥さ。ねえ、この劇場で福子お師匠さんのショーの踊りをやるんじゃないのかい。

智恵

ええ。ここで踊ってから、東口の紀伊國屋書店ビルの前の新宿通りから、南口の武蔵野館を回って歌舞伎町までパレードするんだってねえ。

灌子

福子お師匠さんに、智恵さんに、鈴子に津々子にあたい。「七人の女侍」とはいつても、たった五人じゃ仕様がないわよねえ。ほらっ、あっこの隅っこにも一人いるわよ。

鈴子

隅に柳沢勉がいる。

智恵

あらっ、日本橋の呉服問屋の御曹司の勉さん。

鈴子

ああ、帳場のお金をネコババしたのが大旦那にばれて、座敷牢で謹慎処分を喰らっていた御曹司だよ。

勉

(襟を直しながら) 灌子姐さんからの呼び出しとあらば、座敷牢の鍵なんて、番頭をだましていちころでさあね。なあ、灌子。

灌子

あいよ、おまえさん。

勉

灌子、あたしも今日一日は女形をやるつもりだよ、宜しく許してよね。

灌子

あいよ、好きにしな。

智恵

へえ、これで六人の女侍か。七人にはもう一人だねえ。

灌子

なあに、応援はあたしや福子お師匠さんの馴染みの浅草仲見世通りの連中や、神田明神下や下谷竹町の幼馴染が、浅草寺にお参りしてから貸し切りバスやぎゅうぎゅう詰めの地下鉄で新宿のパレードに押しかけて来るのさ。今日の新宿はすっちゃかびんちゃんに賑わうわよう。

智恵

すっちゃかびんちゃんか。

勉

きつと、東武東上線の田舎町寄居の訛りだよ。

書類を持った福子がいる。

灌子

あらっ、福子お師匠さん。遅かったじゃないか。

福子

はい。これ、佐々木千里の新ムーラン・ルージユが入っている雑居ビルの権利書さ。



勉

ええつ、あの靖国通りに面した雑居ビルを丸ごと買い取ったのかい。さぞ、凄い金額だったろうぜ。だけど、よく売り渡してくれたものだよなあ。

福子

たまたまビルのオーナーが、わたしの浅草の幼馴染だったのさ。まあ、わたしの初恋の人ともいえるのかなあ。

灌子

あんた、幼馴染が多いわよねえ。

福子

ねえ、よく初恋をしたものさあね。あれも恋、これも恋ってね。幼馴染のだれもがわたしの子分になりたがってねえ。

灌子

あんた、ガキの頃から姉御をやったのかい。

智恵

佐々木千里を新宿から追放する計画は、着々と進んでるんだねえ。

福子

ああ、それもこれもレイテ沖で戦死した主人のお陰さあね。

灌子

へえ、戦死したご主人は、いったいいくらぐらい残したんだらうねえ。

智恵

なんでも、戦死したご主人の実家は島根か鳥取の大富豪だったらしいわよねえ。

灌子

大富豪。

智恵

跡取りの一人息子さ。駅からご主人の実家まで、他人の土地は踏まずに帰れたらしいからねえ。

灌子

その財産を、福子お師匠さんががっぽりと受け継いだのかい。義理の父の遺言状もありましたからねえ。

福子

そうよねえ、義理の父と母を死ぬまで看病して看取ったのは、福子お師匠さんだものねえ。

灌子

あんた、よく取材をしてるわよねえ。

佐々木千里が走り込む。

千里

福子、おまえ、俺の劇場になにをした、えつ。劇場には踊り子は一人もいやしねえ、人っ子一人いやしねえ。福子、おめえ、またなにかやらかしやがったなあ。

福子

あらっ、踊り子はあまりに賃金が安過ぎて、ストライキでもしてるんじゃないのかい。ストライキが流行っている時代だからねえ。あまり人を安くでこき使うと、ひどいしっぺ返しを喰らうことになるからねえ。

千里

権利書は、あのビルの権利書はいくらで売ってくれるんだ。

福子

おやつ、買い戻してくれるのかい。

千里

福子

千里

福子

いくらだ。  
恨みつらみは倍返しっていうじゃないかい。  
倍返し。それは、いくらなんでも阿漕が過ぎやしないかい。恨みつらみは行って来いだ。  
あいもかわらず、ケチだわよねえ。踊り子はねえ、関西の劇場のプロデューサーに引き抜かれて、いま頃は東京駅を離れて、熱海も過ぎた関西行きの特急列車で、八十人の踊り子の団体がはしゃいで駅弁でも食ってる頃さ。関西の劇場は条件がい  
いからねえ。

灌子

関西の劇場のプロデューサー。福子、福子お師匠さん、あんた、確か関西の劇場のプロデューサーに、幼馴染の知り合いがいると  
いつてたわよねえ。

千里

なにつ、そんなことをいつたずらか。この女は、どこにもかしこにも幼馴染がいっぱいいるんだ。福子、てめえという女は。

福子と千里、睨み合い、対峙する。

浴衣姿の大輔、英二、武、純一郎が走り込んだ。

鈴子

おやつ、これは、ちよいとした「真昼の決闘」になっちゃったわよねえ。

智恵

ああ、ちよいとした「ハイ・ヌーン」のシーンだよ。とても、コントをやる雰囲気じゃねえなあ。

大輔

あんたたち、エキストラをやりなさいな。

英二

エキストラ、俺が十羽ひとからげのエキストラ。

だけど、灌子姐さんと福子お師匠さんのお陰で、いい卒論は書かせて貰ったんだけど、あの准教授、なにが気に入らないんだか、俺に留年しろといいやがった。やっぱり、女の内幕物は卒論向きではなかったのかなあ。

純一郎

わたしはね、舶来のミシンが二台も売れて、念願の課長の内示が下りましたです、はい。

智恵、アコーディオンで「ハイ・ヌーン」を弾き、英語で唄う。鈴子、ドラマのシンバルを叩く。

福子

昭和二十五年五月、榎本健一率いるエノケン一座が解散した。ムーラン・ルージュも裸の興行には抗しきれず、ストリップパー

千里

のヌードショーを復活させたわよねえ。それがどうしたというんでえ。

福子

でも、ヌードショーも長くは続かなかったわよねえ。関西から呼び寄せる際の踊り子の高額な出演料や旅費や宿泊費。とうとう、ムーラン・ルージュはヌードショーを断念したけど、経営不振は克服できなかったわよねえ。だから、わたしはムーラン・ルージュの踊り子を辞めたのさ。

千里

ああ、知ってらあ。

福子

ムーラン・ルージュの踊り子は、進駐軍の慰問に行ったり、キヤバレーのフロア・ショーで踊ったりして稼いだり、喫茶店の女給をやったりしたわよねえ。

灌子

そうだったわよねえ。男の踊り手や芸人のアルバイトは地獄だったらしいわよねえ。闇物資売りのブローカーをやって、そのサヤで食っていたんだってねえ。

福子

ムーラン・ルージュの軽演劇のファンは、ヌードショーに引きずられたりはしなかったのさ。

灌子

そう、ストリップのファンは戦後に新しく生まれた観客層だった。戦後のどさくさで景気よくなったアンちゃんや新興成金たちがファンとなったのよねえ。打ってつけの刺激ある見世物がストリップだったんだわ。

福子

経営としては、ある程度の満員が続けばやっていける算段だが、実際は客足のバラツキは激しかったし、インフレと入場税五割の中での経営は容易ではなかったのさ。

千里

……。

灌子

ひどい時には、月に二十万もの赤字だものねえ。そのたびに質屋通いで、その穴を埋めざるを得なかったのよねえ。

福子

マスター、あなた、あれだけあった銀行貯金も使い果たしたんだってねえ。

千里

うう。

福子

七月、朝鮮戦争勃発で軍需景気が起こり、日本の戦後からの脱却が加速的に進み始めた。そうだったわよねえ、佐々木千里プロデューサー。

灌子

そうだった。だけど、ムーラン・ルージュはその恩恵を受けることはなく、地方巡業の仕事もないまま、昭和二十五年の夏は新宿に立て籠って、夏枯れと闘いながらヌードショーの公演を続けた。違ったっけか、佐々木千里プロデューサー。

福子

こんなことをいった人がいるわ。その頃のムーラン・ルージュの内部を思い起こすと、なんとなく侘しい心持ちがする。低い天井のテックス材が、雨漏りで破れて、アンペラでも垂れているように見えて悲しかった。土間に立っていると、冷え冷えとして、どこからか、こおろぎの鳴く音が、台詞の合間に聞こえる。舞台の暗転の間に、するめやせんべいを売る売店のおぼさんが、電灯を消さないもので、その明かりが反対側の小さな舞台まで届いて、舞台が灰色に見える。何だか満州の小さな町にでもありそうな小屋であった。ねえ。

そう。

智恵  
福子

そして、八ヶ月後の昭和二十六年五月末日、ムーラン・ルージュは、突然その幕を閉じることになる。解散さ。

千里

……。 (泣いて) うう、うう。

福子

泣き落としはやめとくれ。

千里  
福子

(けろっと泣きやんで) だからって、それがどうしたってんだ。劇団は突如解散し、劇場は改装されて六月からはキャバレーとなった。だったわよねえ、マスター。五月三十一日、最後の舞台を終えた劇団員一同が舞台に整列し、観客に別れの挨拶をした。だれもが、涙が流れるばかりで巧く言葉が出てこなかった。だれかがとっさにこう叫んだ。「ムーランは死なず、ただ消え去るのみ」。

そうですか。

智恵  
福子

ムーラン・ルージュ解散の前の月、GHQ総司令官を解任されたコーンパイプのダグラス・マッカーサーは「老兵は死なず、ただ消え去るのみ」の言葉をのこして日本を去ったわ。ポツダム宣言を受諾した日本は、昭和二十年九月二日、ミズーリ号での降伏文書調印、昭和二十六年の吉田茂のサンフランシスコ平和条約調印。日本は戦後から次の時代へ移ろうとしていたのさ。

ええ、そうだわよねえ。

智恵  
福子

マスター、あんたは、もう新宿を退いたらどうなのさ。恋女房のお絹さんと故郷の御殿場にもお帰りよ。

千里

いや、おめおめと御殿場には帰れねえ。俺は千葉の船橋の家に引き籠るよ。

福子

もう、新宿には姿を現さないんだねえ。

千里

ああ、劇団に解散は付き物だからなあ。もう、金輪際、新宿に

武

は戻らねえよ。  
マスター、千里マスター。マスターは、佐々木千里マスターは、心底、新宿が、ムーラン・ルージュが好きなんです。莫大な銀行貯金もすべてムーラン・ルージュの再生で使い果たしたんだ。戦後のムーラン・ルージュ復活にも佐々木千里ならばと人が集まったんだ。

千里、とぼとぼと去る。

智恵

(撮って) シャッターチャンス。どうやら、わたしの新宿ムーラン・ルージュの特集の取材もジ・エンドのようだわねえ。あつ、いけない、竹上誉デスクに公衆電話から電話をしなくちゃ。ああ、どこからでも電話ができる電話線のない電話ってないものなのかなあ。だけど、騙す奴の上には、もっと騙す奴がいるもんなんだねえ。

福子

ジ・エンドかねえ。そのようだよねえ。どうだい、花の大東京の自家のさのさ節で、ひと踊りと洒落ようじゃないかい。女の復讐は、にっこり笑ってするものなのさ。

大喝采。

大輔が蓄音機を回す。全員が「さのさ」を踊る。

十二 新宿駅南口 甲州街道の陸橋 昭和三十六年 秋 夕暮れ

花束を持った竹上誉と林智恵がいる。電車の音。「東京オリンピック」の歌が流れている。

智恵

竹上誉デスク、退職おめでとうございます。いい送別会でしたわよねえ。

誉

ああ、新宿駅南口には、いい割烹料理屋があるからなあ。林智恵さん、もう、俺をデスクと呼ぶのはやめてくれないかなあ。あなたこそ、デスクに昇進おめでとう。もう、昭和も三十六年の秋かあ。

智恵 譽

ええ、三年後にはいよいよ東京オリンピックですわねえ。  
ああ、東京はどこもかしこも道路工事だ。首都高速道路に新幹線かあ。東京もオリンピックでごろつと変わるぜ。ほう、この新宿駅南口の甲州街道の陸橋で、まだ女子大生だった智恵さんが赤い風車が回るムーラン・ルージュを眺めたのかあ。

智恵 譽

便利な時代になるわよねえ。

智恵 譽

ええ、あの時代、新宿にはまだ高層ビルなんてありませんでしたからねえ。

譽

あなた、福子お師匠さんのお弟子になった日本舞踊で名取になつたんですってねえ。

智恵 譽

ええ、まあ。

譽

福子お師匠さんは、いまも新宿御苑で踊りのお師匠さんをなさっているんですってねえ。津々子ちゃんも内弟子になつたんだってねえ。

智恵 譽

ええ。瀧子姐さんは日本橋の呉服問屋の御曹司の勉さんと結婚をして、いまでは、すっかり日本橋の呉服問屋の若女将さんですからねえ。なにが不治の病だよ。

譽

なあ、真つ昼間つから酒ばっかりかっくらいやがって、まったく呆れ果てるぜ。あれほど口うるさかった大旦那さんも、亡くなつたんだってなあ。

智恵 譽

ええ、いまや勉さんが立派な跡取りですよ。人間、改心して真人間になると、人間まで違っちゃうんですねえ。

勉と瀧子がいる。武と英二が入って来る。

武 譽

旦那、若旦那。この帳簿ですがねえ。

智恵 勉

お黙り、お黙りしたらお黙り。ああ、お黙り。

武 勉

丁稚風情は黙ってればいいんだって。ああ、お黙り。

譽

武はまだ丁稚のまま、旦那になつた勉にこき使われていますさあね。ああ、人生だけは、わからねえよなあ。あなた、小説のネタには困らないよねえ。

智恵 譽

でも、デスクが忙しくて、小説を書く時間も勿体なくなつてしまつてさあ。

英二がいる。

誉

だけど、早稲田大学を留年はしつつも、なんとか卒業した西浦英二が入社したじゃないか。

これが、まったくの役立たずでしてねえ。

英二

(溜息をついて) はあ。

誉

だって、武と瀧子姐さんは結婚したばかりじゃないか。

瀧子

これが、まったくの役立たずでしてねえ。

武

(溜息をついて) はあ。

大輔が踊っている。

誉

瀧子姐さんに振られた大輔は、まだ踊りをやってるんだってねえ。

福子と、風呂敷包みを持った津々子がいる。

福子

ええ、これが筋が悪くてねえ。でも、わたしの私設秘書みたいなことをやってますのさね。鳥取の亭主の実家と新宿御苑の稽古場を行ったり来たりしてますのさあ。

智恵

あれっ、福子お師匠さん。

福子

この甲州街道の陸橋からは、ムーラン・ルージュの赤い風車の灯りがよく見えると聞いたものでねえ。ねえ、今年の二月、佐々木千里は長年のムーラン・ルージュ経営の功績が認められて、第二回演劇人祭の演劇功労賞として、日本演劇協会から表彰されたんですってねえ。

智恵

ええ。

福子

戦前、戦中、戦後と二十年間も休まずに舞台を続け、人材を日本の芸能界へ提供し続けたこと、しかも、それを個人経営で成し遂げたことを考えれば、当然の受賞だよねえ。

誉

福子お師匠さん。

福子

だけど、佐々木千里がこの吉報を知らされたのは、新宿中央病院のベッドの上だった。ねえ、やっぱり新宿へ戻って来ていたんだねえ。

智恵

ええ、千里の舞い戻り。

津々子

へえ、やっぱり、恩を仇で返すつもりだったんだっぺ。「鶴の

福子

恩返し」とは、偉い違いだっぺなあ。  
そして、受賞の喜びの余韻がまだ消えない五月十五日、佐々木千里は心筋梗塞でこの世を去った。享年七十歳。寿命を果たしたわよねえ。人は、棺桶に蓋をしてみないとわからないとは、よくいったものだわよねえ。ねえ、津々子ちゃん、仲の悪い人にとつては悪い人だけど、仲のいい人にとつては、とつてもいい人というのが人間関係なのかもしれないわよねえ。人間関係ほど複雑なものもないわよねえ。

津々子

お師匠さん。おらは、なんにも知らねえのっす。

福子

ああ、女は過去を白紙にする消しゴムなんて持ってはいないんだねえ。ねえ、病床の佐々木千里は、遺言をテープに残していたわ。「ムーランを興してくれ」。テープには、ムーラン・ルージュに半生を賭けた男の執念が残り残されていたわよねえ。病床の佐々木千里は、片時もムーラン・ルージュの思い出から離れることはなかったのさ。

どこからか「東京行進曲」が流れている。

福子

ムーラン・ルージュとは、人々の青春が劇場にあった時代の幸福な出会いの物語なのよねえ。(読むように)新宿のムーラン・ルージュのかたすみゆうまぐれ居て我は泣きけり。あれっ、あそこに見えるのが、ムーラン・ルージュの赤い風車かねえ。

完

「東京行進曲」が流れる中で、カーテンコール。